

ブルターニュのパルドン祭り

—パルドンの火と夏至の火—

The Pardon Festivals of Brittany
— Fires of the Pardon and Fires of the Summer Solstice —

関沢まゆみ

- ① ブルターニュ地方の民俗調査
- ② サン・ジャン・デュ・ドワ (Saint-Jean-du-Doigt) のパルドン祭り
- ③ パルドンの火と夏至の火焼き行事
- ④ 伝統的信仰とパルドン祭り

[論文要旨]

本論は信仰と宗教の関係論への一つの試みである。フランスのブルターニュ地方にはパルドン(pardon)祭りと呼ばれるキリスト教的色彩の強い伝統行事が伝えられている。それらの中には聖泉信仰や聖石信仰など多様な民俗信仰(croyances populaires)との結びつきをその特徴とするいくつかのタイプが存在するが、なかでもtantadと呼ばれる火を焚く行事を含むタイプが注目される。フィニステール北部に位置するSaint-Jean-du-Doigtのパルドン祭りはその典型例であるが、聖なる十字架がtantadの紅炎の中で焼かれる光景は衝撃的である。ブルターニュ各地のパルドン祭りにおけるtantadの火の由来を考える上で参考になるのは、夏至の夜の「サン・ジャンの火」(feu de la saint Jean)の習俗である。この両者の比較により、以下のことが明らかとなった。伝統的な習俗としては夏至の火の伝承が基盤的であり、そこにパルドン祭りという教会の儀礼が季節的にも重なってきて、パルドン祭りの中にtantadの火として位置づけられたものと考えられる。伝統的な「夏至の火」には、先祖の霊が暖まる、眼病を治す、病気や悪いことを焼却する、という信仰的な側面が確認されるが、それは火の有する暖熱、光明、焼却という3つの基本的属性に対応するものである。また、tantadの火を含まない諸事例をも含めての各地のパルドン祭りの調査分析の結果、明らかになったのは以下の点である。パルドン祭りの構成要素として不可欠なのは、シャベルの存在と聖人信仰(reliques信仰)、そしてプロセシオン(procession)である。パルドン祭りはカトリックの教義にのみ基づく宗教行事ではなく、ブルターニュの伝統的な民俗信仰の存在を前提としながら、それらの諸要素を取り込みつつ、カトリック教会中心の宗教行事として構成され伝承されてきた。したがって、パルドン祭りの伝承の多様性の中にこそ伝統的な民俗信仰の主要な要素を抽出することができる。火をめぐる信仰もその一つであり、キリスト教カトリックの宗教行事が逆に伝統的な民俗信仰の保存伝承装置としての機能をも果してきているということができるのである。

①…………ブルターニュ地方の民俗調査

(1) アナトール・ル・ブラズの調査

日本の民俗調査研究と併行して筆者は1999年から2003年にかけて、フランス、ブルターニュ地方の伝統文化や祭礼行事についての現地調査を実施中である。柳田国男の創始した日本の民俗学の国際化へむけての一つの試みである。とくにこの3年間はブルターニュ半島西部に位置するフィニステール県(Finistère)を中心に、この地方でパルドン祭りと呼ばれているキリスト教的色彩の強い民俗行事を中心に調査を行ってきた。

調査地域としてフィニステールを選んだ理由は、19世紀末にアナトール・ル・ブラズ(Anatole Le Braz)(1859-1926)が行なった聖人伝説の採集を中心としたこの地域の民俗に関する調査記録が存在しているからである。この19世紀末の調査記録の存在が現行の民俗との比較を可能にしてくれると考えたからである。

アラン・タンギーの‘La quête d'un folkloriste à la lumière de l'ethnologie: Anatole Le Braz et saints bretons’(「民族学的方法によるある民俗学者の探求—アナトール・ル・ブラズとブルターニュの聖人たち—」)[Alain Tanguy 1996:285-305]は、ブラズ没後70年を経て、ブラズの再評価の可能性について論じた最初の論文である。A.タンギーはそのなかで、19世紀後半においてブラズがブルターニュの聖人伝説に関心をもったことについて、まさに時代の要請に合致していたことを指摘



し、次のように述べている。まず、「1850年代以降のブルターニュの聖人研究の飛躍的發展」と題した節で、18世紀から19世紀半ばの1850年まで、ブルターニュの聖職者たちが宗教改革や啓蒙思想に次々と接触し、徐々に知的な厳格主義の方へと変化していった結果、民衆の間に伝統的に存在していた聖人信仰やパルドン祭りが否定された。しかし、1840年代末、ブルターニュ司教区の狭い枠を越え、教皇至上の信仰心を広く流布させることを奨励するローマの典礼を再確認したことによって聖母信仰の発達と聖人信仰の復興がはかられた。つまり、合理主義とジャンセニズムによる啓蒙の世紀のカトリック教から、民衆の願望によりよく沿うような信心の新しい形にとって代わられたのである。こうしてブルターニュでは土着の古い聖人が流行することとなり、奇跡が彼らの生涯に後光をあたえ、疑われるどころかますます大きな信憑性を獲得することになった。そして、歴史家たちが資料の乏しい中世社会の歴史を構築するために聖人伝を参照するという態度を示していた時、その同じブルターニュの聖人について地元の人たちが何を語っているのか、と問う学者はほとんどいなかった」[Alain Tanguy 1996 : 287]。そして、「学者たちの聖人伝が関心の高まりの恩恵を受けている一方で、民衆の聖人伝は口承に基づく知識に関して極端に懐疑的な学界から無視され、軽蔑されていた。1880年頃、地方の古い聖人に関するブルターニュの人々の信仰はほとんど知られていなかった」[Alain Tanguy 1996 : 289]。このような中で、ブルターニュのTréguier地方出身の哲学者のエルネスト・ルナンより「100を数えるこの地方の聖人はどれも5世紀あるいは6世紀、つまりブルトン人の移住の時期からのものである。そのほとんどは実在した人物だが、伝説によって寓話じみた光に囲まれている。比類なき素朴さをもったこれらの寓話は、民衆の想像力とケルト神話の真の宝物とでもいうべきものだが、完全に記述されたことはいままでない。ベネディクト派修道士やジェズイットたちによって収集された教訓的なもの、そしてMorlaixのドミニコ派修道士アルベール・ル・グランが記述した素朴で奇妙な話もごく一部にすぎない。これらの古い物語の宝物はいったいどこに隠されているのか。それは民衆の記憶の中だ。礼拝堂から礼拝堂へと渡り歩き、善良な人々に話してもらいなさい」[Ernest Renan 1973(1883) : 82-83]と、はじめて聖人伝説の収集を呼びかけた。また、1892年にもE.ルナンは‘Feuilles détachées’（“Les Gallois en Bretagne”, Paris, 1892）のなかで、「ブルターニュの古き聖人たちは日々失われている。何人かの善良な婦人が、司祭が知らないふりをしている伝説をまだ覚えている。一刻も早くそれらの話を集めにいかなければならない」と危機感を募らせており、それにこたえたのが当時33歳のブラズであった[Alain Tanguy 1996 : 290]。

ブラズは1892年から94年の3年間、研究助成を得て聖人伝説の聞き取り調査を行ない、その成果を順次、‘Les Saints bretons d’après la Tradition populaire’（「民間伝承にもとづいたブルターニュの聖人たち」）『ブルターニュ年報』（1893-97）の10本の論文として発表していった。しかし、発表された論文は3年間に行なわれた調査のうち、1年目の途中までの資料によるものでしかなかった。なぜなら、「口承に基づく知識に関して極端に懐疑的な歴史家」ほどではなくとも、民俗学者の間からもブラズによって発表された聖人伝説をめぐるその資料についての厳しい批判がなされたからである。

一つには、情報提供者の選択と情報の質の問題、すなわち信頼のおける話者による信頼のおける資料であるか否かという資料の信憑性に関する批判、そして、もう一つには、ブラズの記述の問題、

すなわち農婦たちから聞いたことを文字通りに解釈し、書き写さなかったという、ブラズによる「加筆(rajouter), 補筆(recomposer), 書き直し(réécrire)」に対する批判であった。「彼はただ聞いたことをではなく、自分が感じたことを解釈したのだろうか」などといわれ、ブラズは採集した伝説を解釈し、文字通り書き写さなかったという理由で批判されたのである⁽²⁾。

ところで、この言葉は『遠野物語』[柳田国男 1910]をめぐる柳田国男への批判を思い出させる。『遠野物語』は佐々木喜善が話した通りに書かれたものなのか、それとも柳田が加筆あるいは脚色しているのではないか、という指摘である[相馬備郎 1961, 桑原武夫 1976, など]。とくに、序文に「此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月頃より始めて夜分折々訪ね来り此話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上手には非ざれども誠実なる人なり。自分も亦一字一句をも加減せず感じたままを書きたり」(下線筆者)とあるが、この下線部分の意味をめぐってはこれまでも議論がなされてきているところである[岩本由輝 1983]。佐々木が柳田を訪ねるときに同席していたという水野葉舟の発表した「或る隠居が死んだ、その通夜の晩の事(略)」(『怪談』『趣味』4-6, 1909年)と柳田第22話「佐々木氏の曾祖母年よりて死去せし時(略)」との比較や、柳田自身による『遠野物語』の初版と増補版との比較検討などが行なわれてきており、「『遠野物語』は、素材は佐々木から提供されたものであっても、文章は完全に柳田自身のものであり、場合によっては内容的に加筆が行なわれた可能性が大きい」[岩本由輝 1983: 37-38]とされている。

民俗学の草創期である19世紀後半から20世紀初めにかけて、日本では柳田国男(1875-1962)が『後狩詞記』(1909年)や『遠野物語』(1910年)を発表した頃、それと前後して、フランスのフィニステール地方においても、ブラズが聖人伝説の調査収集を行ない(1893-1897)、“La Légende de la Mort” (『死の伝説』)[Anatole Le Braz 1893]や“Au pays des pardons” (『パルドン祭りの国』)[Anatole Le Braz 1900]などを発表していた。そして、聞き取りによって採集された資料の信憑性をめぐって同様の批判がなされていた。しかし、柳田もブラズもそれぞれ、当時の急速で激しい近代化の波のなかで廃れていく伝統や伝承を見直そうとする動機をもち、その結果、民衆に語り伝えられている伝承の聞き取りを行なっていった点が共通している。柳田国男はその後、民俗学という日本発の学問を構築したが、一方、ブラズは学術的にはまったく評価されず、民俗学者としてではなく「地方に根ざした一作家」と位置付けられてきた。

このブラズの没後、長い間行方不明になっていた彼の調査ノートが、1985年にプレスト大学のドナシャン・ローラン(Donatien Laurent)によって発見されたことをきっかけにブラズの再評価が試みられ始めている。2003年3月にプレスト大学図書館で筆者が数えた範囲では55冊の調査ノートが收藏されているが、それらは、現在、D.ローランの指導のもとでA.タンギーによって、翻刻と分析がすすめられている。この調査ノートと発表論文との照合がなされる時、あらためてブラズの正当な評価がなされていくものと思われる。

筆者がプレスト大学においてブラズの調査ノートを読んだかぎりにおいては、ブラズはいつ、どこで、だれに聞いた話か、を記録していることが注目された⁽³⁾。また『パルドン祭りの国』では、祭りの儀礼を詳述するというよりも祭りに訪れる人物の描写が卓越していることが注目された。つまり、ブラズは祭りの次第や構成に対するよりも、祭りに集まる人々の格好や行動、目的、会話などに関心をもっていったことがわかる。そこで、ブラズの記述のそのような傾向性のある程度理解した

うえで、ブラズの調査記録を活用することは有効と考え、19世紀末のブラズの調査記録が残されているフィニステール地方のパルドン祭りの現在の民俗調査を実施したのである。

(2) パルドンとトロメニ

ブルターニュには野に咲く花ほど多くの聖人が存在しているといわれ、人々の聖人への信仰もカトリックへの信仰も篤いといわれている。教会暦には各聖人の祝日が設けられている。フランスにおける代表的な教会暦聖人には、聖母マリアのほかに使徒、殉教者たちがいる。また、ペストの治癒聖人や眼病の治癒聖女などの特定聖人もいる。ブルターニュ地方にはほかにも数多くのしかも歴史が明らかでない聖人が存在し、人々に信仰されている。聖人信仰は初代教会の時代に殉教者崇拜から生まれ、中世になるとキリスト教世界で発展したもので、1563年のトリエント公会議ではカトリック教徒の聖人崇敬が確認された。それを受けてブルターニュにおける聖人信仰は自由になっていった。その後、前述したように、18世紀から19世紀半ばの1850年までは宗教改革や啓蒙思想の影響を受けた聖職者たちによって聖人信仰は否定されたが、1840年代末、ブルターニュ司教区の狭い枠を越え、教皇至上の信仰を広く流布させることを奨励するローマの典礼を再確認したことによって、聖人信仰の復興がはかられて現在にいたるのである。

聖人の祭り ブルターニュの町や村の教会(église)やシャペル(chapelle)と呼ばれる礼拝堂には、聖人の像が安置されており、その聖人の遺骨の一部あるいは一片が聖遺骨(relique)として保管されている例も多い。それぞれの聖人の祝日には、その聖遺骨や聖人像、聖人を刺繍したバニエール(bannière・旗)などへ捧げるミサとそれらの聖なる遺骨を教会の外に出して、十字架を先頭に町や村の中の一定の順路をプロセション(procession・宗教行列)することが行なわれている。

このような形を基本として行なわれる聖人の祭りの代表的なものとして、ブルターニュにはパルドン祭り(pardon)とトロメニ(troménié)の2つがある。パルドン祭りは個々の町や村で教会やシャペルにまつている聖人の数だけ行なわれるといっても過言ではない。とくに5月から10月に集中的に行なわれるキリスト教的色彩の強い祭りで、8月15日の聖母マリアの昇天節に行なわれるものが多い。

一方、トロメニは現在、ロクロナン(Locronan)、グエヌウ(Gouesnou)、ランドロウ(Landeleau)の3カ所のみで伝承されている。そして、この3つの町ではいずれもパルドン祭りは行なわれていない。「トロメニがあるからパルドンは要らないのだ」という言い方をする。また、トロメニはブルトン語で「土地を囲う」という意味であり、そのプロセションをブルトン語で‘Tro ar relegou’「聖遺骨の巡回」[Chanoine L.Kerbiriou 1942: 10]という。その迎る道は聖人の散歩道であるとか、領主から1日あるいは1晩のうちに囲えるだけの土地を与えるといわれて聖人が歩いた道であるとい伝えられており、聖人を顕彰するという性格が強い。

Locronanのトロメニではサン・ロナン(Saint Ronan)を、Gouesnouのトロメニではサン・グエヌウ(Saint Gouesnou)を、Landeleauのトロメニではサン・テロ(Saint Thélo)を、それぞれ対象としたミサとそれぞれの聖人の遺骨を担いだ行進が行なわれ、それらのトロメニにおいてはそれぞれの町の教会やシャペルに安置されている十字架や聖像やバニエールも全て参加する。その行進は教会から出発して、必ず太陽と同じ方向つまり時計まわりに廻り、再び教会へ帰って来ることによって終る。

トロメニの行なわれる日は、Locronanでは7月の第2日曜日(サン・ロナンサン・ロナンの聖人の日は6月1日)、Gouesnouでは復活祭後40日目のAscension(サン・グエヌウサン・グエヌウの聖人の日は10月25日)、Lanleleauでは復活祭後7度目の日曜日のPentecôte(サン・テロサン・テロの聖人の日は2月9日)と決まっている。パルドンは基本的に聖人の日を対象としているのに対し、トロメニでは聖人の日とはまったく関係なくキリスト教の教会暦に合うものとなっている点が異なる。なお、Locronanのトロメニの日は聖人の日ではなくキリスト教暦にも合わないが、これがケルト暦に合致するとの説がD.ローラン[1995:11-57]によって提出されている。

したがって、同じ聖人の祭りといっても、パルドン祭りが比較的一般的な聖人をキリスト教の教会暦にある聖人の祝日にあわせて行なわれている例が多いのに対して、トロメニでは6,7世紀にブリテンやアイルランドからブルターニュに渡ってきた隠修士(ermite)の由緒を強調する宗教儀礼としての性格がみとめられる。そして、トロメニの行なわれる月日については、聖人の日ではなく、キリスト教の教会暦にしたがう例と聖人の日でもなく教会暦にも合わないような、D.ローランのいうケルト暦にしたがって行なわれる例がみられることは、キリスト教以前の聖なるものへの信仰とキリスト教以後の信仰との習合の可能性を示すものとして注目される。しかし、キリスト教とキリスト教以前の信仰との関係についてここでただちに習合というような漠然とした語で論じることは避けねばなるまい。文献と民俗の両者を含む現地での精密調査が必要とされる所以である。

ロベール・エルツと聖ベッソ ヨーロッパにおける聖人の祭りの調査から、その分析を試みたものの早い例としてロベール・エルツによる北西イタリア、ポー河の水源地帯にあたる山岳地帯において崇拝されている聖人、聖ベッソをめぐる研究[Robert Hertz:1913]があり、渡邊昌美によって紹介されている[渡邊 1989:119-127]。

渡邊の訳文によれば、聖ベッソの祭りは毎年8月10日に、キリスト教の儀礼として、司祭によるミサとプロセシオンを中心に行なわれている。その祭りの概要は次のようなものである。標高2,047mの山岳放牧地に高さ約30mの岩塊の露頭がある。これが聖ベッソの山といわれている。そこに十字架と小さな祈祷所があり、霊場となっている。聖ベッソを信仰する人々は近い村でも2時間、遠い村では8時間もかけて険しい山道を登ってくる。司祭がミサを行ない、聖者を讃える説教をした後、行列が行なわれる。参加者は村ごとに年齢や村での地位により順序よく整列し、大きな聖者像を担い、色鮮やかな幟を持って、ロザリオの祈りを高唱しながら、時計と反対回りに岩を一巡する。そして一巡するごとに聖者像に平伏し、その足に接吻する。昔は幟の木枠の中に収められた聖なるパンを配分したという。昔、岩の上の十字架が木製だった頃は削り取って持ち帰ったものだし、エルツの調査当時でも岩に背中を擦り付けて病気の治癒や不妊の治癒を願ったり、岩のかげらを持ち帰る風習は残っていた。岩のかげらは大切に保管され、非常時に身に帯び、あるいは病人に飲ませるコップに沈めるので「聖ベッソの石」と呼んで聖遺物扱いにしている。行列の終わった後は舞踏、宴会、供物のお下がりの交換などを行なう。

聖ベッソの来歴について、教会の公式伝説では彼はテーベ軍団の一員であったとされている。虐殺を免れた兵士ベッソはこの山間にやってきて伝道した。牧童たちが主人の羊をあぶっているのを見つけ、盗みの罪を説いたところ、立腹した牧童たちは彼を岩塊から突き落とした。そこへ追手が追って彼を惨殺したという。一方、地元で語られている話では、ベッソは羊飼いの若者で、常に人

里離れた山の放牧場において、神に祈りを捧げていた。羊は彼の回りに群れて、しかも丸々と肥っていた。これを妬んだ邪悪な牧童がベッソを崖から突き落として殺した。冬、ある者が雪中に花を見つけ、雪を取り除くと哀れな若者を発見し、岩山に葬った。この牧童、哀れな死、そして自分たちの先祖による発見という話のほうに村人は共感を示すという。

エルツによれば、教会の公式伝説よりもこの地元で語られている伝承のほうがベッソ伝説の原型に近いと考えられるとし、さらに、このような伝説の基本には聖ベッソ山の岩石信仰が存在したと推測している。祭りのなかでも岩塊の周囲を回る行列にこそ、その岩塊の神聖な性格が示されており、この行列が最も重要な儀礼であるという。山での暮らしを知らない教会の僧の学識によって、平地の聖堂においても10世紀末から11世紀初め以来、聖ベッソが守護聖人の一人に加えられ、聖遺物も奉安され、信仰の焦点が岩山から平地の聖堂に移され、テーベ軍団という一大殉教者集団にベッソの籍が与えられたのだとエルツは考えた。

人々の間では、聖ベッソは万能な聖者で、病気や魔女の呪い、兵役除けなどに効験があるといわれ、とくに兵隊にとられた若者は聖像から細片をとって身につけていくとその身の安全が守護されると信じているという。

このエルツの分析では、人々の間に伝えられてきた土着的な信仰が中世世界を経るなかで、教会の指導によってキリスト教的な歴史的意味付けがなされて定型化していく過程と、それにもかかわらず、人々の民間信仰が伝承されつづけていくという点が注目される。このようなキリスト教による民間信仰の定型化という傾向は全ヨーロッパ的にも14世紀中ごろから、小霊場の急増というかたちで認められるといわれている[渡邊 1989: 127]。

エルツによる「聖ベッソの祭り」の描写は、「パルドン祭り」という言葉こそ用いられてはいないものの、フランス、ブルターニュ地方における町や村の聖人を対象としたパルドン祭りによく似ている。「聖ベッソの祭り」というように聖人の名前を冠しての呼び方はブルターニュにおいては聞かれず、ブルターニュではどここのパルドン祭りというように町や村の名前で呼ばれることが多い。ブルターニュでは、地名表示にフランス語とブルトン語との併記形式がとられている⁽⁴⁾。このようにブルトン語が存在していながら、パルドン祭りについてはそれを意味するブルトン語が存在しない点に注意される。パルドン祭りとは、一般的には、人々がシャペルに集まって、その聖人のもとに日ごろの罪の許しを乞うことだといわれているが、パルドン(pardon)にあたるブルトン語の呼称が見当たらないのである。

そこで、パルドン祭りがキリスト教以前の信仰の名残りではなく、17世紀から18世紀に教会の指導によって新しく誕生した祭りだというジョルジュ・プロヴォによる最近の研究[Georges Provost 1998]が注目される。この17世紀というのは、教会が民俗信仰を迷信とみなしながらもそれらを教会の指導のもとにおこうとする動きがあった時期であり、そのような背景の中で現行のようなパルドン祭りの様式が整えられていったのだというのである。しかし、現在、各地に伝えられているパルドン祭りを現場で観察する限りでは、それが17世紀から18世紀の教会の指導によってのみ始められた祭りだとは到底考えられない。パルドン祭りというブルトン語が存在しないことと、パルドン祭りの現実の多様で多彩な民俗伝承との間には、どのような関係があるのか。この問題を明らかにするためにも個別の事例研究を行なう必要がある。

②……………サン・ジャン・デュ・ドワ(Saint-Jean-du-Doigt)のパルドン祭り

(1) 火のパルドン

R.エルツは北西イタリアの聖ベッソの祭りの分析から、土着的な民俗信仰がキリスト教的な意味づけを与えられて定型化されていく過程を想定したが、G.プロヴォはブルターニュのパルドン祭りに対して、そこにキリスト教以前の信仰の名残りなどはなく、17世紀から18世紀に教会の指導によって始められたものにすぎないという。筆者が、そのG.プロヴォの説に疑問を抱かざるを得なかったのは、まさに彼自身がその根拠としてあげるブルターニュ半島北西部沿岸に位置するSaint-Jean-du-Doigtという小さな村のパルドン祭りの存在からである。G.プロヴォは、Saint-Jean-du-Doigtのパルドン祭りの記録は、最古のものでも1701年のものでしかない[Georges Provost 1998]という。しかし、公式の記録が発見されなければ、それ以前の祭礼伝承は存在しないと論断できるであろうか。

2000年夏、Saint-Jean-du-Doigtを訪れて同地のTristan夫妻の親切と厚意により、関係資料や写真類などを見ながら説明を受けたとき、大きな衝撃を覚えたのは、他ならぬタントッド(tantad)の上で火焰に包まれた十字架であった。聖なる十字架を火で焼くとはなにごとか、という疑問がまず浮かんだのである。そして、この地のパルドン祭りの情報を集めるうちにたいへん内容豊かな祭りであることがわかってきた。そして、このSaint-Jean-du-Doigtは、ブラズも1898年に訪れ、'Saint-Jean-du-Doigt : Le Pardon du Feu' を書いており、このパルドン祭りを「火のパルドン」と名づけていたのである[Anatole Le Braz 1998(1887) : 143-199]。

(2) 奇跡の伝説

Saint-Jean-du-Doigtは人口620人(2001年現在)で、この村の名前は「サン・ジャン(聖ヨハネの伝説)の指」という意味である。この村では名前の通り、「サン・ジャンの人さし指」と伝えられる聖遺骨が存在し、長さ55mm、直径32mmの円筒形をした金と銀の小さな聖遺物箱に入れて教会で保管している。これは現在もなお多くの人々の崇敬を集めている。

サン・ジャンの指がこの村にきたのは1425年頃と伝えられており、その後すぐに、この聖遺骨を目に当てると目の病が治るといふ奇跡を期待して多くの巡礼者が訪れるようになった。François de Kergrist / Louis Le Guennec 'L'église de Saint-Jean-du-Doigt et ses annexes histoire et description' (「Saint-Jean-du-Doigt 教会とその付属品」)(1910)には、saint-Jeanの指がこの村にきた経緯についての伝説が次のように記されている。

サン・ジャンが斬首された後、彼の弟子達は遺骸を持ち去り、セバスト(Sebaste)に埋葬した。彼の墓では数多くの奇跡が起こったので、背教者ユリアヌス帝(在位361~363)の時代にも、それらの奇跡はまだとても多く、広く知られていたため、その噂は皇帝ユリアヌスの耳にも達した。激怒した彼は聖遺骨を掘り返して焼いて灰を撒き散らすように命じた。しかし、薪の山に火をつけるや否や土砂降りの雨が降りだし、火は消えてしまった。その場にいたキリスト教徒たちはかなりの量の骨を集めることができた。右手の人さし指はエルサレムに運ばれて、十字軍の時代までそこにあった。正確な時期はわからないが、ある時テクル(Tècle)という名のノルマンディー娘がその一部をノ

ルマンディー地方コタンタン半島中央部にあるサンロー(Saint-Lo)近くの故郷へ持ち帰った。それを安置するためにサン・ジャンに捧げられた教会が建てられたが、そこも多くの奇跡で有名になった。

この教会から遠くないところで、1425年頃、1人のブルガスヌウ(Plougasnou)出身の若者が、ある大貴族に仕えていた。彼はサン・ジャンに大変熱心な信仰心を抱いていて、その「指」を深く崇敬していた。ブルターニュへの帰国が近づいた時、彼は幾ばくかでもそれを故郷に持っていきたいということだけを願っていた。その恩恵を得るために絶えず祈り、しばしば絶食した。出発の日、彼は教会へ行って特別熱心な祈りを捧げた。自分でも理解できない歓喜にとらわれたのを感じながら出発したが、最初の町につくと鐘楼の鐘々がひとりで大きく鳴り出し、彼が通ると木々がおじぎをした。それを見た住民たちは彼を魔法使いではないかと疑い投獄した。

翌日、目が覚めると、彼は自分の教区の、現在ではペナハ(Pen-nar-c'hra)の丘の上を流れている泉の近くにいた。Traon-Mériadekの谷、ブルターニュ半島南岸にある都市Vannesの司教サン・メリアデックに奉獻された礼拝堂、ブルガスヌウの教会、そして父親の農場が見えた。まだ夢を見ているのかと疑いながら谷へ降りて行ったが、彼が進むにつれて道の並木の檜が幹を傾けるのだった。サン・メリアデックの礼拝堂に着くと、ひとりで蠟燭がともし鐘が非常に激しく鳴り出したので、近隣の村々の住民たちが集まってきた。彼らは祈りを捧げている若者を見つけた。突然、彼がそれとは知らずに持っていた聖遺物が一飛びに祭壇まで飛んで行った。彼の右の手と腕をつなぐ関節の皮膚と肉の間にそれはあったのである。感動と喜びから回復して話せるようになると、彼はそれはサン・ジャンの指であると人々に明かし、何が起こったのか語った。

この話を耳にしたブルターニュ公は若者に直接話を聞き、ノルマンディーのサン・ジャン教会へも若者が仕えていた大貴族へも彼が投獄されていた町へも問い合わせたが、集められた情報は彼の話を確認するものだった。聖遺物がサン・ジャンの指であることに疑いはなかった。この恩恵への感謝を表して、大公はモルレ(Morlaix)のノートル・ダム・デュ・ミュール(Notre-Dame-du-Mur)からブルガスヌウへ、そしてサン・メリアデックの礼拝堂への盛大なプロセションを行なった。礼拝堂で大公は聖遺物に接吻し、首から下げて持っていた指を入れるための聖遺物箱を懐から出して与え、他にもたくさんのお金を寄付をした。

聖遺物による奇跡を求めて多くの人々がこの小さな礼拝堂へ来て献金をした。当時、村の名前はサン・メリアデックといい、ブルガスヌウの領地であったため、巡礼者による献金もその3分の1がブルガスヌウの領主へ納められていた。しかし、1790年にブルガスヌウより独立し、村の名前もサン・ジャン・デュ・ドワと改名された。また、村にはサン・メリアデックに捧げられた礼拝堂があったが、それもサン・ジャンに捧げる教会へと改築された(1440年着工、1513年完成)。

その教会建設の途中、1505年のことである。ブルターニュ公国最後のアンヌ王女(Anne de Bretagne)(1477-1514年)がフランス国王ルイ12世に嫁いだ後はじめて自分の旧領を訪問していた旅の途中、モルレに来た時、左目が重症の炎症をおこしていた。そこで、サン・ジャンの聖遺物によって目の病気を治そうと考えた。最初は司祭たちの配慮で、聖遺物をモルレに運ぼうとしたが、教会を出るや否や大きな音を立てて聖遺物をのせた御輿が壊れてしまい、聖遺物は教会の自分の収納場所へ戻ってしまっていた。この話を聞いたアンヌ王女は聖遺物を求めにいくべきは自分自身だったと神とサン・ジャンに謝り、徒歩で参詣することを希望した。実際にはSaint-Jean-du-Doigtの

村から5,6里離れたラン・フェトゥール(Lann-Festour)と呼ばれる荒野まで天蓋付きの輿に乗り、そこからは歩いて教会に向かった。信心深いアンヌ王女はSaint-Jean-du-Doigtの村にいる間、ずっと祈り続けた。盛儀ミサではナント(Nantes)の司教ギローム・グェグエン(Guillaume Gueguen)より聖体拝領を受け、ミサの後、司教がむき出しで差出した聖遺物を見つめ、それを目に当てた。すると、あっというまに炎症が消えた。王妃は感謝の印として、建築途中の教会を完成させるための資金援助を行なうほか、金メッキした銀製の聖杯と聖体皿、金メッキ銀製の十字架、ビロードのバニエール3旗を寄付した。

この伝説を記したF. de Kergristによれば、この教会の聖遺物およびアンヌ王女から寄贈された宝物の数々を守るために、村人たちは昔から自分たちで管理する術を心得ていたという。たとえば、旧教同盟(宗教戦争中の過激派カトリックの政治・軍事組織)の時代(1591~96年)の古い報告書は、教会財産管理委員会や教会堂責任者たちが王党派や旧教同盟の乱暴な軍人たちによる盗難を避けるために、宝物を夜のうちに秘密の場所に隠したという。またフランス革命では聖像の破壊などが行なわれ、フィニステールの多くの教会では現在も破壊痕がそのまま残されているが、このSaint-Jean-du-Doigtでは教会の建造物も聖遺物も何一つ破壊されることがなかった。それについても、村では抜き身の炎の剣を手にした大天使達が、夜、ステンドグラスの前で歩哨をして聖遺物を守っているのを見たと言われていたという。

このような教会受難の歴史を乗り越えて守り伝えられてきた、サン・ジャン、サン・メリアデック、サン・モーデ(saint Maudez)の聖遺骨を秘密に管理する方法は現在も同じである。私たちの現地調査へ全面的に協力してくれたTristan夫妻の語るところでも、現在、聖遺物は6月23日に行なわれるパルドン祭りのときにだけ公開されるが、神父と秘密のファブリシアン(fabricien・教会の世話人)の2人が出すことになっている。そして現在もファブリシアンが誰なのかは秘密であるため、わからないのだという(2000年調査)。

また、アンヌ王女についても、現在、村人の誰一人として知らない者はいないほどである。彼らは口々に「アンヌ王女が教会の泉水で目の病気を治した。そのお礼にお金のない農民も目の悪い人もSaint-Jean-du-Doigtへ来られるように道路がただになるようにしてくれた。だから今もブルターニュの高速道路は料金をとっていない」、「教会を建て始めたのは1440年だった。1505年にアンヌ王女がSaint-Jean-du-Doigtへ来た。王女は聖遺物を目に当てた。すると、目が治ったので、教会を完成させるためのお金を出した。それによって1513年に教会が完成した」などの話をしてくれる。

ブルターニュではアンヌという女性への憧れと崇敬の念が強く伝えられている。キリスト教以前に存在したといわれる女神アーナ(Hana)や海の女神アエス(Ahès)への信仰、そして聖母マリアの母サンターヌ(sainte Anne)への信仰、さらにAnne de Bretagneへの憧れと崇敬である[Anatole Le Braz 1998(1887):267,アルフォンス・デュブロン 1992:337]。ブルターニュには、Sainte-Anne-d'Auray, Sainte-Anne-la-PaludというSainte-Anneの名前を冠した町と村がある。Sainte-Anne-d'Aurayにはサンターヌへ捧げられた大規模な教会があり、7月26日のサンターヌの祝日には盛大なパルドン祭りが行なわれている。また、Sainte-Anne-la-Paludはフィニステール県西部に位置し、大西洋を見下ろす丘の手前にぽつんと建てられたシャペルの中に1548年に造られたサンターヌの石像があり、1913年にローマ法皇より黄金の冠を拝戴したという。毎年8月末に行なわれる

Sainte-Anne-la-Paludのパルドン祭りには多くの巡礼者が参詣に訪れる[関沢 2001]。サンターヌに参詣することによって、この世だけでなく来世での安穩も保障されるという信仰がみられるのである[田辺 1992]。

Saint-Jean-du-Doigtの村人たちからの聞き取りによる限り、現在もサン・ジャンの聖遺骨を大切に保管しているのは、聖遺骨による奇跡のうわさが大勢の巡礼者をよんで教会の知名度をあげ、この村を活性化するというを期待してではなく、ブルターニュにおいて伝統的に信仰を得ている女神と同名のアンヌ王女の目の病気を治したという伝説をもつサン・ジャンの聖遺骨が村の誇りであるからといってよい。パルドン祭りの開催と伝承とにはTristan夫妻や神父をはじめ関係者たちの多くの努力と献身、奉仕がそそがれているが、それは決して観光や開発を目的とするものではない。

(3) パルドン祭りの現在

Saint-Jean-du-Doigtのパルドン祭りはかつては6月23日と24日との2日間行なわれていたが、1914年以後、6月24日の1日だけで行なわれるようになった。しかし教会側の混乱があり、まもなく、行事は日曜日に行なうのが望ましいという理由で、24日にこだわらずに、6月の最後の日曜日に行なうようになった。パルドン祭りが2日間行なわれていた時は、23日の7:30、10:30、15:00にミサがあり、その後プロセションが行なわれた。そして24日にもう一度大きなミサがあった。しかし、現在では日曜日の15:00にミサがあり、その後プロセションを行なうという形に簡略化されている。

ここでは、2001年6月24日(日)に行なわれたパルドン祭りの実際を記述してみる。14:00に村の入口のカルヴェール(La Croix Bleue)に、この地方の伝統衣装を身につけた村人たちが集し、その近くにある収蔵庫から聖人を刺繍したバニエール(Bannière de Notre-Dame de Lourdes, Bannière du Bon Sauveur, Bannière de Locquirec, Bannière du Sacré-Coeur de Garlan, Bannière de Garlan, Bannière de Saint Melarの計6本)を出して、出発の準備をする。他の村の者もバニエールを持ってここに集合する。例年、他村より参詣するのはLarmeue, Ploezoch, Gaellanという3つの村のバニエールである。昔は聖人像を持ってきたといわれており、聖人像を忘れたらその像がひとりてにやって来ていたこともあったという。一同はGuimaecという町のバグパイプの楽隊とその演奏する行進曲に先導されて、十字架やバニエールを掲げながら教会の前の広場まで行進を行なう。教会前の広場では十字架とサン・ジャンを刺繍したバニエールを掲げた村人と司祭が待っている。そして行進してきた人々のバニエールと1本ずつコツンコツンと先を合わせてバニエールのキスの挨拶を行なう。この挨拶をすれば教会の門をくぐってもよいのである。この行進では、収蔵庫から出した6本のバニエールとパルドン祭りに参加する村人たちとこの村から都会に出ている子供たちの家族や親戚の者たちが教会を目指して歩いていくのである。

15:00から教会でミサが行なわれる。その後16:00からプロセションが行なわれる。このプロセションの列は2本の十字架を先頭に、サン・ジャンの像を刺繍したバニエール、その他の聖人のバニエール6本と、サン・ジャンの指、サン・メリアデックの頭蓋骨、サン・モーデの上腕骨などの聖遺骨、サン・ジャンの格好を真似て羊を連れて杖を持った男児、これはその年に洗礼を受けた4、5歳の者から選ばれる、そして天使の翼を肩のところでとめた赤ん坊、サン・ジャンの名前をもつ

船の模型などを運ぶ役付きの者、その後ろを司祭そして一般の村人とつづく。とくにサン・ジャンのパニエールは重いので、力のある村の男性が持つことになっている。

教会の門を出るとまず西側の道を進み、集落を囲むように時計回りに歩き、Pen-ar-c'hraと呼ばれる丘へと讚美歌をうたいながら行進する。この途中、とくに立ち寄り場所はない。Pen-ar-c'hraは村はずれで、道が交わり三叉路になっている場所である。その三叉路の中央の小さな空間にサン・メリアデックの泉があり、その水源側にはカルヴェールが建てられていて、神聖な場所であることが示されている。このカルヴェールに隣接して、高さ5～6mほどの山型のtantadが築かれる。

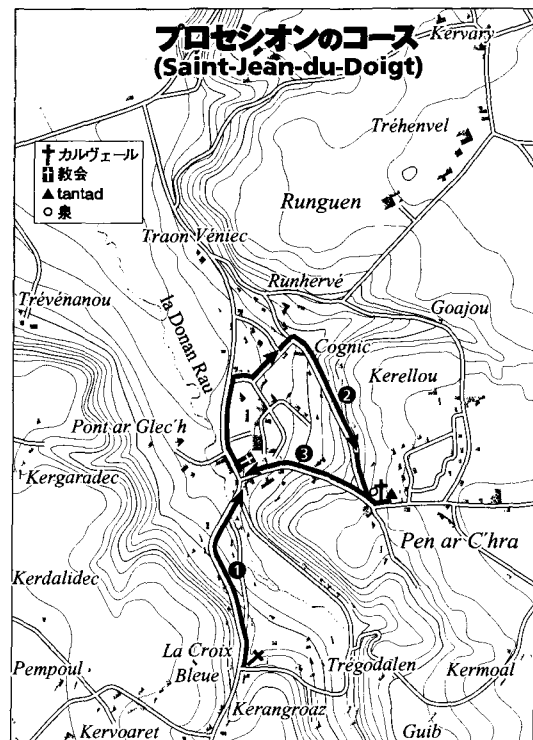
tantadを作るのは15人の男性で、彼らは2つのグループに分かれている。まず1つは材料となる木の枝やハリエニシダを集めてく

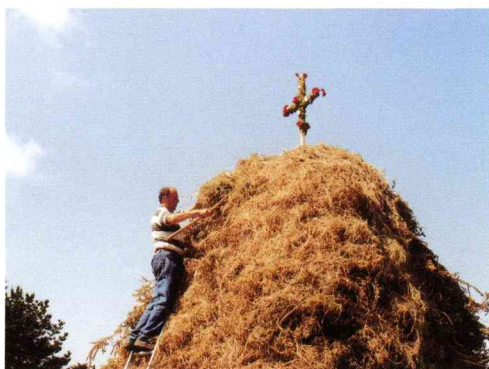
るグループであり、もう1つは、その木の枝とハリエニシダを山型に築くグループである。材料を集める人たちは7、8人で、6月の最初の土曜日に木の枝とハリエニシダをPaul de Pressacという地主の所有地、そこは'Ty Son'という地名の場所であるが、そこから切ってきて乾かしておく。もう一方の7、8人は24日の午前中にtantadを築く。tantadの形ができると最後に枝を組んで作った十字架にバラの花をまいて飾って立てる。この2組の15人の男性たちは、tantadを作る仕事を親から子へと引継いできている者もいれば、Saint-Jean-du-Doigtに住むようになって自分の代でその仲間に入った者もある。基本的に株のようなものは固定しておらず、「伝統的な祭りを続けたいという人がつとめている」というボランティア的なものである。

教会からPen-nar-c'hraへのプロセションによって全員がtantadの前に着くと、まずそのtantadの前にある泉で神父によるベネディクションが行なわれ、人々に聖なる泉水がふりかけられる。その後、祈りの言葉が捧げられ、tantadへの点火がなされる。

点火の方法は、2001年の場合、教会から子供が点火用のキャンドルを運んできたがそれは用いられずに、tantadを作った男性2人がライターで火をつけた。前任者の司祭はそのキャンドルで自ら点火を行っていたといい、それが伝統的な方式のようである。しかし、プラズが訪れた1898年当時はまた異なっており、教会の尖塔からこの小高いPen-nar-c'hraのtantadのところまで長いロープを張って、龍の形をした花火のようなもので点火していた。教会の尖塔からロープを使って花火でtantadに点火していたことは現在でも語り継がれている。しかし、ある年、途中で花火が落下して死亡者を出したために、それ以後はこの方法は用いられなくなったという。

tantadは点火されると、猛烈な勢いであつというまに燃え尽くしてしまう。人々は熱いので遠巻





tantad を作っているところ



教会へ向かう楽隊と村人



教会のミサの後のプロセシオン

Saint-Jean の聖遺骨をのせた輿



Saint-Jean の役の少年

tantad

Saint-Jean-du-Doigtのパルドン祭り



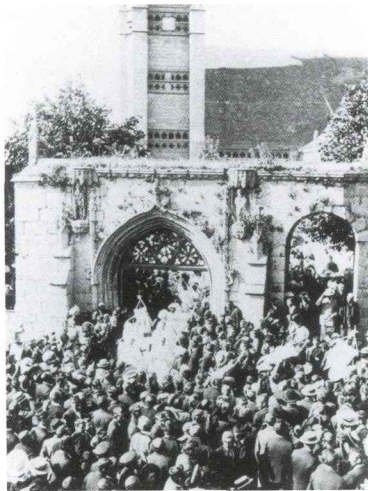
炎に包まれる tantad



Saint-Jean の聖遺骨を眼にあててもらう人々



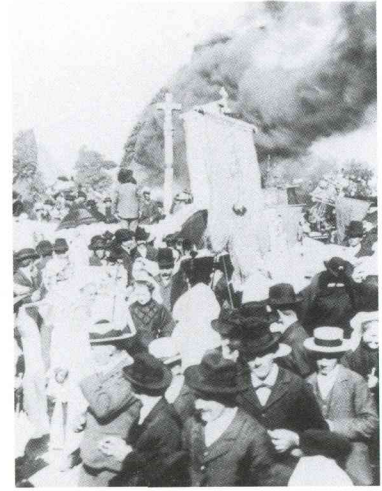
Saint-Jean の聖遺骨容器



Saint-Jean-du-Doigt の教会の門



tantad にプロセシオンが到着



煙をあげて焼け落ちる tantad

下段の3枚は1905年撮影のSaint-Jean-du-Doigtのパルドン祭り(Alain Tanguy氏提供)

きにその様子を見ていて、十字架が倒れて焼け落ちるとパルドンは終わりだという。そして灰だけになる頃には人々は教会までの近道を通して坂道を降りていってしまう。教会に帰ると、再び簡単なミサが行なわれる。そして、人々は祭壇の前に立つ神父の前に一列に並び、目がよくなるようにとサン・ジャンの指を入れた銀の筒を右目と左目の両方に当ててもらふ。聖遺骨を当ててもらった後は、小さなかごに献金をする。そして、パルドン祭りの行事としては、この後、教会前の町の広場で音楽や余興で人々が楽しむ時間がつづく。トランプのコンテストやフェアが行なわれ、それらの収益金は来年のパルドン祭りの資金として活用される。

2001年、筆者が参加したパルドン祭りでミサを行なった神父は Yves Auffretであった。筆者の質問に対する彼による説明では、十字軍が saint Jean の指をこの村に持ってきたこと、プロセシオンで泉のまわりで行なったのはキリストの血(印)=聖水をあげる儀式であること、このパルドン祭りはキリスト教では夏至の祭りで、夏至と夏の出発を祈るために tantad を燃やして火をあげるのだということ、tantad を燃やした後の灰の上を歩く人もいるがそれにはとくに理由はないということ、そして、パルドン祭りの終りに人々の目にサン・ジャンの指を当てるのは、前任者の司祭がしたのと同じようにしているのだが、人々のなかには「なぜ、そのような古い行為を行なうのか」とたずねる人もいる、などのことが語られた。また、tantad については Saint-Jean-du-Doigt だけの特別なことではなく、神父自身、子供の頃には毎年6月24日には村で火をたき、村の子供たちは皆その火の回りに座っていたことを覚えているという。そして、Saint-Jean-du-Doigt のパルドン祭りには、教会的なものや世俗的なものとの両者があると理解して自分は儀式を行っていると説明してくれた。

(4) tantad の火をめぐる伝承

Saint-Jean-du-Doigt のパルドン祭りを最も特徴づけているのは大きな tantad である。この tantad を燃やすとパルドンが終る。2001年の現地調査においては、tantad に点火され、頂上の十字架が崩れ落ちると人々の口からどよめきが聞こえ、祭りの終りが告げられたかのようになり、灰になるまで見とどける者は少なかった。この tantad の火をめぐる伝承についてあらためて聞き取り調査を行なったところ確認できたのは次のようなものであった。

「昔は、隣りの人が自分のうわさをしたり、隣りの人とけんかばかりしていると、その理由を紙に書いて tantad の火に燃やせばうわさやけんかが消える(なくなる)といわれた」、「この紙は教会の司祭がまとめて燃やした。悪い気持ちや悪い事を燃やすために」(Anna Paul 1924年生まれ)、「昔の伝統では、結婚したい女性は tantad の火のまわりを7回まわると願いがかなうといった」、「火は燃えるから、病気にかからないように、悪い事がないようにと、tantad の燃えた灰を家に持ち帰った。この灰は牛が病気にならないように守ってくれた」、「tantad をつくらないとか、燃やさない年には大変なことがあるという。tantad を燃やすときには雨が降っていてもやむ」(以上、Eric Tristan(1936年生まれ))など、tantad の火に関するいくつかの伝承が確認された。

これら現在の聞き取りによる火の信仰や火の機能と意味を整理すると、第1に、悪いものが消える(噂や喧嘩)、第2に、火の周りをまわると願いがかなう(結婚)、第3に、灰に御利益があり持ち帰る(悪いことがないように・牛が病気にかからぬように)、第4に、燃やしないと大変な事が起きる、という4点になる。

そこで、19世紀後半に、この同じSaint-Jean-du-Doigtのtantadの火に関する伝承を記録した3人の記述をみよめる。

まず、19世紀末のブラズの記録によれば、目の見えない者たちがtantadに一番近い場所を求めて目がよくなるようにと煙を目に当てていたことが記されている[Anatole Le Braz 1998(1887)]。またブラズは「tantadをつくらぬとか燃やさない年には大変なことがある」という伝承を確認しており、これについて次のように記述している。1793年ロベスピエールの年にSaint-Jean-du-Doigtではいつものミサがないので、tantadの儀式をしようとした時、ブルガスヌウのサンキュロット(過激共和派)の1人がきて、この区の委員の名で点火を禁じ、もし続行すれば革命裁判所に召喚すると脅したため点火できずにいた。するとその時、突然大きな火事がおこりブルガスヌウのそのサンキュロットの農場が全焼し、家畜たちもすべて灰になってしまった。そして、「もしいかなる火もサン・ジャンに輝くことがなかったら、その年はそれからずっと太陽が見えないだろう」というこの地方の言いまわしがあったので、tantadは点火できなくとも農場の大火事の火によって最大の不幸は防げたといわれたという。この2つの記述は現在の聞き取りによる火の信仰や火の機能と意味のうち、第2の、火の周りをまわると願いがかなう、第4の、燃やしないと大変な事が起きる、という2つの伝承に対応している。

また、1860年にF.de KergristがSaint-Jean-du-Doigtのパルドン祭りに訪れた時、人々がtantadの灰の中の燃えさしを火事や雷除けのお守りに持ち帰ったり、芳しい「サン・ジャンの草」の束を持ち帰っていたと記述している[F.de Kergrist 1910(1896)]が、これは現在の聞き取りによる、火の信仰や火の機能と意味のうち、第3の、灰に御利益があり悪い事がないように持ち帰る、という伝承に対応している。

この灰に関して、Fañch Postic[1999:137-168]に紹介されている、P.R.Giotによって“Bulletin de la Société Archéologique du Finistère”(1998,t.127)に発表された手紙資料によれば「Saint-Jean-du-Doigtの祭りは災いをもたらす呪いに対して効果があり、地元の祭りの日に人々はこの効果を目的に、薪の山や束に火をつけていく。その次に、それらの灰が教会の利益のために売り出されている」(p.344)とあり、tantadの灰の競売が行なわれていたことがわかる。災いをもたらす呪いに対して効果があり、効果を求めて人々は点火するというのは、現在の聞き取りによる火の信仰や火の機能と意味のうち、第1の、悪いものが消える、にあたり、灰が教会の利益のために売り出されているというのは、第3の、灰に御利益があり悪いことがないように持ち帰る、にあたっている。

tantadの火に関して現在も聞かれる前述の第1から第4の信仰的事象は19世紀末のSaint-Jean-du-Doigtでは、外部の観察者にもそれとわかるほど明白な信仰的現象として伝承されていた。しかし、21世紀初頭の現在ではいずれも過去の伝承として語られており、一見したところでは現在はその信仰は顕著にはみられるとはいえない。しかし、信仰という営為が人びとの精神世界に内面化されているものとすれば、その信仰が現在消滅してしまったとは必ずしもいえないであろう。個々人の信仰の中に潜在している可能性が大である。なかでも、「火は焚かなければならない」ということが強調されている点は注目される。

一方、1870年頃Saint-Jean-du-Doigtのパルドン祭りを訪れたイギリス人牧師、Philip Winter de Quettevilleの‘Le Pardon de Saint-Jean-du-Doigt vu par un Pasteur Anglais vers 1870’

(「イギリス人牧師が見た1870年頃のSaint-Jean-du-Doigtのパルドン祭り」) (“Les Cahiers de l'Iroise” Octobre-Décembre 1960)からは、パルドン祭りでtantadが焚かれた後、日の入りの頃、このSaint-Jean-du-Doigtとその周辺地域において、フォ・ドゥ・ラ・サン・ジャン(feux de la saint Jean)とかフォ・ドゥ・ジョア(feux de joie)と呼ばれる夏至の日の火があちらこちらで焚かれていたことがわかる。そこには6月23日 tantad が焚かれた後の夕方、「教会の高い鐘塔に上り四方を見渡すと、数里四方にわたって異教時代の名残である祝いの篝火(feux de joie)が丘や平地で燃え上がるのが見えた」と書かれている。つまり、1870年頃の夏至の日にはSaint-Jean-du-Doigtのパルドン祭りのtantadの火と、その後に各所で焚かれる「フォ・ドゥ・ラ・サン・ジャン」(feux de la saint Jean)とか「フォ・ドゥ・ジョア」(feux de joie)と呼ばれる夏至の火焼き行事の2種類があったことがわかる。しかし、2001年の調査においてはSaint-Jean-du-Doigtにおいてはパルドン祭りのtantadの火以外の夏至の火焼き行事を確認することはできなかった。

③……………パルドンの火と夏至の火焼き行事

Saint-Jean-du-Doigtのパルドン祭りはもともと夏至の日に行なわれ、tantadの火が特徴であるとともに、1870年の記録においてはこの夏至の日の夕暮れにはサン・ジャンの火と呼ばれるもう1つ別の火が焚かれていた。そこで、ここでは、フィニステール地域を対象として、パルドン祭りと火(tantad)、夏至と火焼き行事(feux de la Saint Jean・feux de joie)の両者の関係についての分析を試みることにする。そこで、まず、フィニステール各地のパルドン祭りの調査の結果を整理してみると、表のように分類することができる。

タイプⅠはパルドン祭りに火(tantad)が焚かれるタイプである。Ⅰ-①は、パルドン祭りが夏至に行なわれ、火が焚かれる。Ⅰ-②は、パルドン祭りが夏至以外の日に行なわれ、そこで火焼きも行なわれる。タイプⅡはパルドン祭りには火は焚かれず、それとは別に火を焚く行事があるタイプである。Ⅱ-①は、パルドン祭りが夏至に行なわれ、夏至以外の日に火焼き行事が行なわれるタイプとして想定されるが、実例は存在しない。Ⅱ-②は、パルドン祭りが夏至以外の日に行なわれ、それとは別に夏至に火焼き行事が行なわれる。Ⅱ-③は、パルドン祭りが夏至以外の日に行なわれ、やはり夏至以外の日に火焼き行事が行なわれるタイプとして想定されるものであるが、これも実例は存在しない。タイプⅢはパルドン祭りは存在するが、火を焚く行事が存在しないタイプである。Ⅲ-①は、パルドン祭りは夏至に行なわれるが、火焼きは行なわれない。Ⅲ-②は、パルドン祭りが夏至以外の日に行なわれるが、やはり火焼き行事は行なわれない。

次にそれぞれの調査事例を紹介する。

Ⅰ-①：パルドン祭りが夏至に行なわれ、火が焚かれるタイプの事例

これは前述したSaint-Jean-du-Doigtの事例にあたるが、ほかにもMûr-de-Bretagneのサン・ジャンのパルドン祭り、Lescouët-Gouarecのサン・クロード(saint Claude)のパルドン祭、Plouvienのサン・ジャンのパルドン祭り、などがある。

〈事例1〉 Mûr-de-Bretagneのサン・ジャンのパルドン祭り

話者：Joseph Rouille

表：パルドンの火焚き(tantad)と夏至の火焚き行事(feux de la saint Jean・feux de joie)の組合せ

	タイプ	事例
I	① パルドン祭りが夏至に行われ、火が焚かれる	Saint-Jean-du-Doigt, Mûr-de-Bretagne, Lescouët-Gouarec, Plouvien
	② パルドン祭りが夏至以外の日に行われ、火が焚かれる	Bonen, Trémargat, Quelven
II	① パルドン祭りが夏至に行われ、夏至以外の日に火焚き行事が行われる	なし
	② パルドン祭りが夏至以外の日に行われ、それとは別に夏至に火焚き行事が行われる	Beuzec-Cap-Sizun, Locronan, Goulien, Plabennec
	③ パルドン祭りが夏至以外の日に行われ、やはり夏至以外の日に火焚き行事が行われる	なし
III	① パルドン祭りは夏至に行われるが、火焚き行事は行われない	Saint-Guen, Mellionec
	② パルドン祭りが夏至以外の日に行われるが、火焚き行事は行われない	Querrien, Plouvien (Saint-Jaoua), Sainte-Anne-la-Palud, Gouézec(Trois-Fontaines, Tréguron), Lanmeur, Châteauneuf-du-Faou, Saint-Philibert, Le-Folgoët

ブルターニュ北西部に位置するMûr-de-Bretagneという町には、chapelle de saint Jean, chapelle de saint Pierre, chapelle de sainte Suzanne, chapelle de Notre-Dame-de-Pitié, と呼ばれる4つのシャペルがある。それぞれsaint Jean, saint Pierre, sainte Suzanne, Notre-Dame-de-Pitié, という4人の聖人がまつられており、パルドン祭りも4回行なわれている。2001年の場合、サン・ジャンのパルドン祭りは6月24日、サン・ピエールのパルドン祭りは7月1日、サント・スザンヌのパルドン祭りは7月7日と8日、ノートルダム・ドゥ・ピティエのパルドン祭りは9月16日に行なわれた。そして、パルドンは4つのシャペルにあるが、火がたかれるのはサン・ジャンのパルドン祭りの1つだけである。

サン・ジャンのパルドン祭りは6月24日に行なわれる。10:30に村人がシャペルに集合してから、約300m離れた耕地にある聖泉へ行き、そこで司祭が泉の水を参列者にかけてベネディクションを行なう。その後、11:30頃からサン・ジャンのシャペルでミサが行なわれ、12:00よりプロセシオンが行なわれる。パルドン祭りの主役であるサン・ジャンの聖像を子供たちが担ぎ、参列者は皆、泉の先に広がる畑の一角まで行く。そこには、シャペルの委員会(comité)の者9人が枝を集めて山型に築き、頂上には樺の木の十字架を立てる。それに司祭とのコミューテの者2,3人が火をつけて燃やす。この火はフヴェ(fouée)と呼ばれている。この火についてMûr-de-Bretagneで説明してくれた男性によれば「fouée」はキリスト教以前においては、saint Meenといわれる夏がきたことを知らせる(夏の始めの)祭りに焚かれた火のことであった。冬の季節の悪かったものを浄化する(purifier)ために火を焚いた。キリスト教化された後、カトリックの人々はその祭りをキリスト教の祭りに変え

た。それでサン・ジャンの祭りの火になった」と語った。

〈事例2〉 Lescouët-Gouarec のサン・クロードのパルドン祭り

話者：Elie Kerrah(1934年生まれ)

内陸部に位置するLescouët-Gouarecという人口193人の村では6月24日にサン・クロードのパルドン祭りが行なわれる。15:00からシャベルの庭にある礼拝堂(oratoire)でミサが行なわれた後、16:00頃、シャベルから約400m離れた畑までプロセションが行なわれる。畑には前日にモミヤナラの木を集めて周囲約5m、高さ約4.5メートルの山型にtantadを築く。頂上には栗の木の枝を1本立てる。これに点火するのはファブリシアンと呼ばれるパルドン祭りの世話役である。17:00頃には終了する。

シャベルは1885年に建築されたもので、それ以前は建物はなかった。シャベルが建てられたきっかけはマリア顕現の奇跡の場所という伝説による。1821年9月8日に、Jean Le Paulという12歳の羊飼いの男の子がこの場所でマリアをみたという。村の司祭はその子供の話を信じなかったが、村人たちが大勢集まってきた。1885年にその場所に建物を建て、1901年にシャベルの鐘がつけられた。Loudeacのパルドン祭りのプロセションに参加したら病気が治ったという人がおり、現在でもシャベル内には松葉杖が奉納されている。

〈事例3〉 Plouvienのサン・ジャンのパルドン祭り

Plouvienのサン・ジャンのシャベルにはその敷地内に泉がある。6月24日にパルドン祭りが行なわれる。シャベルの建物の周囲を一周、プロセションする。昔はサン・ジャンの聖像があり、近隣の村々からもバニエールをもって参詣者が大勢きたといわれるが、現在は200人くらいの小規模な行事となっている。このシャベルの庭にある泉の水は目の病気を治したり、イボをとるのに効き目があるといわれている。イボをとるには泉水をつければよい。イボをとるのは1年中いつでも可能であるが、目については6月24日に泉水で目を洗うと病気が治るが、他の日では効き目がないという。

また、昔は6月24日のサン・ジャンの日に木や藪などの枝を集めて山型にしたtantadを焚いていたためパルドン祭りの日と一致していたが、近年、6月24日に一番近い日曜日に火を焚くように変更された。話者の男性によると「tantadは最も尊敬されたものだった」という。

I-②：パルドン祭りが夏至以外の日に行なわれ、そこで火焚きも行なわれるタイプ

これには、Trémargatの1月29日のサン・ウェルタズ(Saint Weltaz)のパルドン祭り、Bonenの7月第1日曜日のサン・クロード(Saint Claude)のパルドン祭り、Quelvenの8月15日のノートルダム・ドゥ・ケルヴェン(Notre-Dame-de-Quelven)のパルドン祭り、ほかがある。

〈事例4〉 Trémargat のサン・ウェルタズのパルドン祭り

話者：Aime Le Duigou(1954年生まれ)

内陸部に位置するTrémargatという人口173人の村では1月29日にTrémargatの聖人サン・ウェルタズのパルドン祭りが行なわれる。1998年より神父の兼務の都合で1月の最後の日曜日に変更されたが、それまでは何曜日でもどんな天気でもサン・ウェルタズの祝日である1月29日に行っていた。

教会のステンドグラスにはサン・ウェルタズが描かれている。彼はアイルランドからきた隠修士



Trémargat のパルドン祭りと tantad

で、クリスという島に住んでいて修道院を作った。ブルターニュの町を回っていた時、Trémargatの町の人がこの聖人をまつた。

パルドン祭りの日、神父はRostrenenから来る。教会からプロセシオンをして、近くの畑に築いたtantard(話者のAime Le Duigouさんの教示によるスペルで、rがあるがtantadのこと)のところに行く。その畑は所有者に相談して、作物のない所を選んで決めるので、必ずしも毎年決まった同じ場所であるとは限らない。これに新聞紙とガソリンを用いて、神父がマッチライターで点火する。この火の効用は特でない。ただ火を燃やすだけのことだが、それが大事だという。火を燃やし終わると同じ道を通らず別の方向から教会へ帰る。

tantardは祭りの前日に、参加する人が木の枝を少しずつ持ち寄り、Yves HelarmとYves Garandelという代々決まっている家の2人がブナの木を芯にしてその回りに枝を積んで山型にしていく。芯となる木は先に少し葉のついたものを用いる。火で燃やした時、最後にブナが勢いよく燃えるのがtantardを作った2人の自慢になる。

Aime Le Duigouさんによればtantardはブルトン語で、tan=feu(火)、tard=ar c'hoat・ar coat=le bois(木材)、すなわち「木の火」という意味であり、火には許す(pardon)と浄化する(purifier)という2つの作用があるという。パルドン祭りとは許しを乞う人の祭り、つまり人々が罪過を許してもらう祭りであるが、そのもとには冬から夏までの季節の移り変わりを祝うケルトの祭りが存在したと考えられるという。このケルトの祭りでは火で浄化するという観念があった。たとえばtantardの火が消えると若者と牛がまだ暖かい灰の上を歩く習慣があったが、こうして悪いものを清め、無病息災を祈った。tantardの火で浄化することは冬から夏への季節の移行を祝うケルトの祭りの伝統によるもので、本来キリスト教のパルドン祭りとは関係のないことであったという。

〈事例5〉Bonenのサン・クロードのパルドン祭り

話者：Philippe Rouille

内陸部の村、Bonenでは7月の第1日曜日にサン・クロードのパルドン祭りが行なわれる。前日に、村の人は村はずれの畑に木の枝を集めて山型に組み、頂上に栗の木の枝を1本さした、'tantad'と呼ばれるものが作られる。Bonenに住み、シャペルのプレジドン(président)と呼ばれる世話役の1人、Rouilleさんによるとtantadとは、tan= feu(火)、tad=le père、すなわち「父の火」という

意味のブルトン語だという。また、この火を焚くのは「サン・クロードのための火」だという。

2001年の場合、7月1日にパルドン祭りが行なわれた。10:30にシャペルでミサが行なわれ、11:30にシャペルから村はずれの畑まで、祭りの主役であるサン・クロードの聖像を担ぎ、プロセシオンが行なわれた。tantadの周囲に人々が集まると、司祭が点火を行なう。火がつくとtantadが燃え尽きるのを見とどけることなく人々は戻り、サンドウィッチや飲み物を食べ、ダンスや写真撮影をして楽しむ。その後、人々は車で近くのRostrenenという町に行き、Rostrenenの人々と一緒に大きなレストランの別館を貸し切りにして150フランの食事を取り、舞台での余興や福引、ホールでのダンスなどを楽しみ夜中まで過ごす。Bonenは1975年にRostrenenに合併されたため、その後このような会がもたれるようになったのである。

〈事例6〉 Quelvenのノートルダム・ドゥ・ケルヴェンのパルドン祭り

話者：Elisa Oliviero(1923年生まれ)

内陸部に位置するQuelvenは人口100人に満たない村である。8月15日にNotre-dame-de-Quelvenのためのグラン・パルドン(Grand Pardon)が行なわれる。朝5:00から1時間ごとにミサが行なわれ、11:00には大きいミサが行なわれる。そして16:00頃、ヴェブレ(晩課)が行なわれた後、教



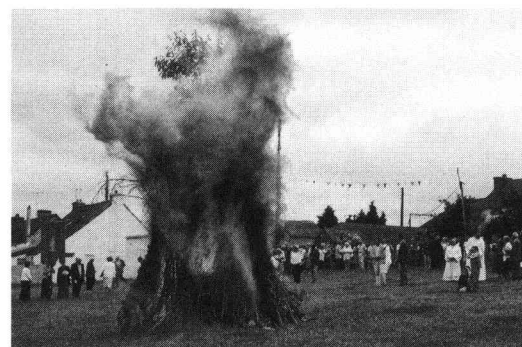
プロセシオン



tantad



神父による点火



燃え上がる tantad

Bonenのパルドン祭りとtantad

会の裏の原っぱに築かれたtantadへとプロセションが行なわれる。このtantadは高さ2mほどの山型に木の枝を積み、頂上に木を1本立てたものである。教会の鐘楼とtantadとの間に長いロープを張り、エンゼルの形をした人形がそのロープを伝わって教会の鐘楼から降りてきて手にしたキャンドルで火をつける。このように人形によってtantadに点火するという例は、他にも、6月7日のStivalや8月1日に近い日曜日のSaint-Nicodemeのバルドン祭りでもみられる。⁽⁶⁾

II-②：バルドン祭りが夏至以外の日に行なわれ、それとは別に夏至に火焚き行事が行なわれるタイプ

これにはBeuzec-Cap-Sizun, Goulien, Plabennec, Locronan, ほかがある。

〈事例7〉 Beuzec-Cap-Sizunのサン・ジャンの火祭り

ブルターニュ半島の西端に位置するBeuzec-Cap-Sizunでは、6月24日のサン・ジャンの日に近い土曜日にフォ・ドゥ・ラ・サン・ジャン(feux de la saint Jean)と呼ばれるサン・ジャンの火祭りを行なう。tantadを作る畑は年によって変わる。それは村人によって提供された場所を使うからである。土曜日の午後、村の人が6~10人程度でtantadを作る。木の枝で山型にし頂上にはヒマラヤ杉を1本立てる。点火するのは夜11:00頃で、村の地域活性化団体(animation)の人たちが点火した。この年は実行委員会が物語をする専門家呼び、火のまわりで子供のためにスコッチの歴史や火に関する物語をして午前1:00頃終わった。これに参加したStephanieさん(1975年生まれ)は火を燃やすのは何のためかはわからないが、この近くではPlouhinec, Pont-Croixでも同じようにサンジャンの火祭りがあるという。

また、Beuzec-Cap-Sizunではサン・ジャンの夏至の日にはバルドン祭りはないが、6月10日にサン・コノガン(saint Conogan)のバルドン祭り、8月の第1日曜日にサント・エスペランス(sainte Esperance)のバルドン祭りがそれぞれ行なわれる。どちらもシャペルでのミサの後、シャペルの周囲をまわる小さいプロセションが行なわれ、その後、皆で昼食を食べる。

〈事例8〉 Goulienのサン・ジャンの火祭り 話者：Aime Kerisit(1922年生まれ)

Beuzec-Cap-Sizunに近いGoulienでは、1979年から80年頃まで、6月24日の日没後、フォ・ドゥ・ラ・サン・ジャン(feux de la saint Jean)とかフォ・ドゥ・ジョア(feux de joie)と呼ばれる火を焚く祭りがあった。

原野でその祭りは行なわれるが、村人は石を敷き、その上に家ごとに持ち寄った木の枝の束を約200個ばかりも高く積んで火をつける。石の形や数はとくに決まっていない。その火を囲んで人々は踊り、火が小さくなると若者たちがそれを飛び越えたりしたという。現在80歳のAimeさんとその妻Yvonneさん(1928年生まれ)は共に、子供のころから祭りに参加していたが、石を置く理由についてはわからないという。また、石はそのまま放置され、家に持ち帰るといふようなこともない。

Cap-Sizun地域では1980年以降、行政の指導によって実行委員会が組織され、それまで各村ごとに行なわれていたサン・ジャンの火を焚く行事が現在では半島の先端部に位置するCledin-Cap-Sizunという場所の一カ所でまとめて行なわれ、集まった人々はクレープを食べたりして楽しむ娯楽的性格の強い祭りになってきている。

〈事例9〉 Plabennecのサン・ジャンの火祭り 話者：Guirriec Yvonne(1921年生まれ)

Brest近郊に位置するPlabennecという村では、Guirriecさんの子供のころ、6月23日夏至の日の日没の頃に村の四辻で何箇所もサン・ジャンの火が焚かれた。点火するのはJeanという名前の人のなかで一番の年長者であった。火が焚かれると、その火が小さくなるまで人々は腕をくんで火の周りをまわった。そして火が落ちるときに「デ・タン・ディ・サン」というお祈りの言葉を唱えた。小さくなった火を子供や若者が飛び越えた。

また、屋根に挿したりするlouzaouen sant Yanneという名前の草を火にくぐらせてから臉につけると眼にいいとか、木の燃えかすを井戸に投げ込むと水が浄化するといった。

Plabennecでは8日後の7月1日サン・ピエール(saint Pierre)の日にも、同様に火を焚くが、点火するのはPierreかPaulという名前の年長者の役目であった。

〈事例10〉Locronanのサン・ジャンの火祭り 話者：Jean-Yves Nicot(1930年生まれ)

Locronanは丘の上に立地した人口約800人の町である。町の中心部に教会があり、その前に広場がある。広場には井戸が掘られており、そのそばに5月1日(現在は5月の第1日曜日)になると必ず「5月の木」(l'arbre de mai)と呼ばれるブナの木が1本立てられる。これを立てるのは徴兵年齢にあたる20歳の男子である。そして、6月23日の夏至の日の夜11:00頃、すでに葉が赤茶色に枯れたこの木を倒して、何本かに切って希望者に売る。残りは細かく切って広場で燃やす。この火をサン・ジャンの火と呼ぶ。

広場の一角に代々、木彫りの聖像を作る職人がいるが、彼は「夏至の日の木が幸福をもたらす」という伝統にしたがって必ずブナの幹の部分を買う。木が小さいので聖像は作れないが、仕事場の近くに置いておくという。

Jean-Yves Nicot(1930年生まれ)によれば、5月1日は自然が復活する日で、森からブナの木を切ってくるのだという。ブナの木は1番早く葉が出る。彼によれば、ゴール人にとってブナの木は自然が生き返ることの象徴であるという。また、ケルトの宗教では夏至には火祭りがあり、Beleonsという神の祭りが行なわれたという。

Locronanでは先に述べたようにトロメニが行なわれる。7月第2土曜日のトロメニの夜、教会のエントランスを舞台にしてサン・ロナン(St. Ronan)の聖劇が行なわれ、広場に集まった観客にトロメニの由来が説明された後、教会から町の一部を小さくプロセションし、広場に帰って来ると、そこで小さなtantadが焚かれる。この時の薪には夏至の日に切ったブナの枝を残しておいて使う。

Ⅲ-①：パルドン祭りは夏至に行なわれるが、火焚き行事は行なわれないタイプ

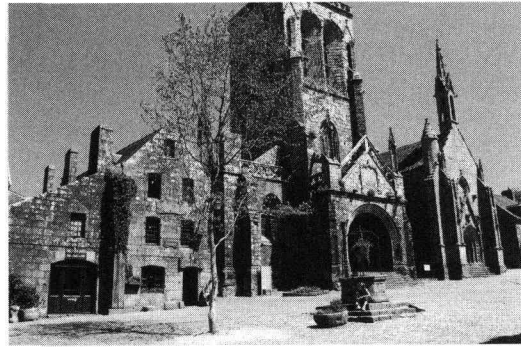
これにはSaint-Guenのサン・パブ(Saint Pabu)のパルドン祭り、Mellionecのサン・ジャンのパルドン祭り、ほかがある。Saint-Guen, Mellionecではともに6月24日にパルドン祭りが行なわれるが、シャベルでのミサのみでプロセションは行なわれない。tantadについての伝承も2001年時点では聞かれなかった。

Ⅲ-②：パルドン祭りが夏至以外の日に行なわれるが、火焚き行事は行なわれないタイプ

これには、Le-Folgoët, Querrien (La-Clarté), Plouvien(Saint-Jaoua), Saint-Philibert, Gouézec(Trois-Fontaines, Tréguron), Sainte-Anne-la-Palud, Châteauneuf-du-Faou, Lanmeur,



徴兵年齢の青年が「5月の木」を立てる



5月1日から夏至まで広場に立てられているブナの木



夏至の夜とパルドン祭りの前夜にブナの木を焚く

Locronanの「5月の木」

ほか多数がある。⁽⁷⁾

以上により、火を焚く行事は夏至に集中していることがわかる。分類上は想定されるⅡ-①のタイプとⅡ-③のタイプが実例としては存在しないというのは、逆に夏至に火を焚くのが基本であったということをよく示しているといつてよい。

また、火焚きが行なわれるⅠ-①、Ⅰ-②、Ⅱ-②のタイプについて、それぞれ夏至に行なわれるか、夏至以外の日に行なわれるかに注目すると、Ⅰ-①のタイプは夏至の火の習俗がパルドン祭りの火焚き(tantad)にそのまま重なったかたち、つまり聖人の日よりも夏至の日が優先されているタイプといふことができる。また、Ⅰ-②は夏至の火焚きが聖人の日のパルドン祭りの中へ火焚き(tantad)として移されたかたち、つまり聖人の日が優先されているタイプといふことができる。そして、Ⅱ-②のタイプについては、夏至の火焚き行事の習俗が根強く残り、パルドン祭りには火焚き(tantad)が導入されていないタイプといふことができる。

④……………伝統的信仰とパルドン祭り

以上の調査事例から指摘できる点をあげてみれば以下の通りとなろう。まず、パルドン祭りの火の習俗の基盤には夏至の火の習俗が存在するという点である。夏至の火の習俗がパルドン祭りにも導入され、そのパルドン祭りへの導入のされ方の差異が今ここにあげた諸タイプの差異として現れていると考えられる。したがって、パルドン祭りにとって、火の習俗は必ずしも必要不可欠なものではない。しかし、パルドン祭りにとってその目的に合致する部分があったからこそ、火の習俗は導入されたものといえる。これはキリスト教カトリック教会の神父たちが積極的に導入したのではなく、伝統的な習俗であったがために導入されざるをえなかったものと考えられる。では、伝統的な夏至の火の習俗を支えていたブルターニュ地方における火の信仰とは何か。

それについて指摘できることは以下の3点である。第1に、夏の到来を喜ぶ太陽への信仰の一表現として解釈できるという点である。そして、それには生者の喜びだけでなく、死者の喜びも含まれると考えられる。生者たちはまさに明るく暖かい季節への変化を喜び、その同じ火で死者も暖をとり、生者と死者とが交流するのである。

事例1のMûr-de-Bretagneで聞かれたsaint Meenの祭り、事例10のLocronanで聞かれたBeleonsという神の祭りなど、かつて夏至には火祭りが行なわれていたという伝説が語り継がれている。夏の始めに冬の季節に蓄積した悪いものを浄化する(purifier)ための火が焚かれていたというのである。それが、キリスト教化されるに伴い、サン・ジャンの祭りへ移行したと語り継がれているのである。そして、夏至の火は一般にはサン・ジャンの火(feux de la saint Jean)と呼ばれているが、Saint-Jean-du-DoigtやLoudeacほかでは喜びの火(feux de joie)とも呼ばれており、これは、夏至の火祭りがもともと夏の到来を喜ぶ祭りであったことを表していると考えられる。

一方、死者との関係においてはサン・ジャンの火と石との関係が注目された。サン・ジャンの火の分布はブルターニュのみならずフランス各地で確認されているが[Arnold Van Gennep 1999(1949)]、他の地方にみられない習俗として注目されるのが死者のための石の存在である[Fañch Postic 1999]。

この習俗についてFañch Postic ‘Quelques aspects particuliers des feux de la Saint-Jean en Basse-Bretagne’ (「バス・ブルターニュのサン・ジャンの火祭りにみられるいくつかの特徴」) [1999 : 137-168]は、いくつかの興味深い事例を提示している。たとえば、H.du Cleziou “La Bretagne pittoresque” (『一風変わったブルターニュ』1886)を引用して、「Saint-Jean-du-Doigtの近くの村で、サン・ジャンの火のまわりで老人たちが火のまわりに円を描くように椅子を置き、少し遠くに座っていたので、どうしたのかと尋ねると、彼らの前の火に近い席は、「それは死者の席だ。死者たちは今夜彼らの子孫を暖めた火で自分たちも暖まりたいのだ」と答えた」という記述が紹介されている。この描写だけでは判断が難しいが、Fañch Posticによれば、この例のようにSaint Jeanの火祭りでは、生者が帰った後、死者たちは石のところに暖まりにくると考えられており、死者のために火のそばに石を置くことがよくみられたという(p.320)。また、これに関連して、Anatole Le Braz “Bulletin de la Société Archéologique du Finistère” (1898年)を引用して、

ブラズがRoudouallecで出会った女性について「彼女は幼いころからサン・ジャンの石をすべて保存していた。彼女の両親の魂は石の上に来て暖まっていたらしい」という記述も紹介している (p.321)。

そして、比較的新しい調査事例として、Fañch Posticは民族学者のChristian Pelras ‘Goulien, commune rurale du Cap Sizun(Finistère)’ (“Études d'ethnologie” Paris,Masson,1966) から、Cap-SizunのGoulienで1960年代のはじめ、「いく度も、石が《an anaon》《ar zant》と呼ばれていることを知った。念入りに選ばれた平らで滑らかな石がしばしば話題にされる」(p.435)という記述を紹介している。そして、Cap-Sizunの民俗を調査したHyacinthe Le Carguet “Le culte du soleil, La génération par le feu : Folklore du Cap-Sizun et de l'Ile de Sein” から、「人々は石の前でひざまずき頻りに祈りを唱えていたのである。人々は家路につく前に石を吟味するようになり、そして石に印をつけることに注意を払うようになった。翌日、各人は自分で印をつけた石のところにいき、前兆を引き出していたのだ。たとえば、これから起こる結婚、あるいは一般的に自ら訪れる死の時期について。もし石が裏返っていたり汚れている時には、その前兆が石の持ち主に訪れるのである。もし、Ile-de-Crozonでヨーロッパコマドリの糞が石についていたならば、それは特に致命的な前兆となる。持ち主は翌年のサン・ジャン祭りに参加できないか、年内最初に死んでしまうというのである。薪の近くに置かれた石はどれも同じ回数だけ投げられていた。私はLe Carguetの証言を確認してはいないけれども、伝えられているところによれば、これら2つの行為はCap-Sizunでは両方混在していた。つまり、火をつける前に9個の大きな石を《Kel'ch an tan》「火のサークル」と呼ばれている薪のまわりに置き、そしてその後、火の中に石を投げたのであった」という記述を紹介している(p.322)。そして、Fañch Posticは ‘La Saint-Jean en Finistère. Richesse et gravité d'un rituel’ [1987 : 44-61]において、サン・ジャンの火をたく祭りが死者と結びつけられ、万聖節(toussaint)に類似していることを指摘しながら、「サン・ジャンで行なわれるのはもちろん祭りであり、そこでは1人1人の出席が求められ、これを避けられるのは身体が自由に動かない人のみである。だからまだ小さな子供でさえも火のそばに連れて来られる。そのうえ、夜に家に子供たちを残すのはよくないことといわれていた(略)。多くの場所で子供たちは炎の上で9回体をゆすらなければならない。そして健やかなる成長と伝染病からの保護の約束を得る。これは《ober nao》《faire neuf》(9回行なう)という行為である」[Fañch Postic 1999 : 316]という。

Cap-Sizun地域に位置し、Christian Pelrasが1960年代に確認していたGoulienで筆者が調査したところ、現在でもサン・ジャンの火で石を暖めていたことは確認されたが、その石によって死者(anaon)を招き、生者と死者との交流がはかられていたというような伝承はすでに忘れられていた。この2002年と2003年の筆者の調査とFañch Posticの記述からもわかるように、サン・ジャンの火には、夏至の夜中、村人たちは全員、屋外に出て、火の周りに死者の霊を迎えて交流し、生者の健康を祈り、未来を教えてもらおうとする、生者と死者との交流の祭りとしての性格がうかがえるのである。ここには、火が生者のみならず死者をも暖める火であるという信仰がみられる。これは、火の属性の一つである暖熱という機能からのアナロジーといえるであろう。

第2に、サン・ジャン信仰といえば「サン・ジャンの病」ともいわれる癩癩の治癒が一般には知られているが、ブルターニュ地方のSaint-Briec湾から南部 l'Aulne-au-sudにいたる広い地域ではサン・ジャンは眼病を治すという信仰がみられるのが特徴的である[Bernard Tanguy 1999 : 156-

157]。

Saint-Jean-du-Doigtにおけるサン・ジャンの聖遺骨は、右手の中指の第一関節が保管され、これを直接目に当てることによって目がよくなるといわれている。ほかにもTrémaouézanには長さ20.5cmの右の上腕骨の断片とサン・ジャンの2つの水晶球が保管されており、6月23日、サン・ジャンのパルドン祭りの前夜に聖なる泉のそばで火をたき、一度火にくぐらせたサン・ジャンの草を臉に当てるのと同じようにしてこの聖遺骨を目の上に当てるのだという[Bernard Tanguy 1999:156]。サンジャンの草については、〈事例9〉Plabennecでも火にくぐらせてから臉に当てていたといっている。この火が眼病の治癒に効験があるという信仰の存在、これは火の属性の一つである光明という機能からのアナロジーといえる。つまり、火の有する「光」と「明かり」という属性が、眼病の治癒という特徴をもつサン・ジャン信仰へと結びついたものと考えられるのである。

第3に、火が罪過・罪障・厄病・邪悪なるものを浄化するという信仰の存在がみとめられる。〈事例9〉Plabennecでは燃えかすを井戸に投げ込み水を浄化したという伝承が確認されたほか、現在でもSaint-Jean-du-Doigtのほか、〈事例1〉Mûr-de-Bretagne、〈事例2〉Loudeac、〈事例4〉Trémargatにおいて、火を焚く理由として、1つには、火による浄化のため、という伝承が目目された。浄化の対象となるものはうわさや悪口、けんかなど不愉快な人間関係、邪悪な気持ち、人間や牛など家畜の病気などで、それらを消すために火を焚くというのである。そしてもう1つは、季節の移り変わりに関連させた伝承で、夏の始まりを祝う行事の中で火によって冬の悪いもの・罪過を浄化するために火をたくという伝承である。この季節の移り変わりに際して、火を焚くことによって浄化するというのは、とくに〈事例8〉Locronanにおける‘l'arbre de mai’の習俗と類似している。5月の第1日曜日に広場にブナの木をたて、そのまま1カ月余り置いておき、6月23日の夏至の夜、これが焼かれるのである。これについては春から夏へという季節の移行を表す儀礼としての解釈が示されている[Donatien Laurent 1995:36]が、これらの両者に共通しているのは火の焼却作用によって浄化するという観念である。つまり、これは火の属性の一つである焼却という機能からのアナロジーといえる。

以上、ブルターニュ各地のパルドン祭りにおけるtantadの火と、夏至の夜の「サン・ジャンの火」(feu de la saint Jean)の分析により、以下の3点が指摘できよう。第1に、もともと夏至の火の伝承が存在していたところに、パルドン祭りという教会の儀礼が重なってきて、パルドン祭りにおけるtantadの火として位置づけられたものと解説できる。第2に、夏至の火をめぐるには、先祖の霊が暖まる、眼病を治す、病気や悪いことを焼却する、という信仰的な伝承の存在が確認されるが、それは火の有する暖熱、光明、焼却という3つの基本的属性に対応するものといえることができる。そして第3に、夏至の火の信仰性が〈事例7〉Beuzec-Cap-Sizun、〈事例9〉Goulienなどのようにパルドン祭りと結びつかなかった例では、現在行政主導の娯楽性を重視したものへと変化してきており、民俗の伝承過程における脱信仰化の一現象としてとらえることができる。

パルドン祭りの構成要素として不可欠なのは、シャペルの存在と聖人信仰(relique信仰)、そしてプロセションである。明確なのは、パルドン祭りはキリスト教カトリックの教義にのみもつづく宗教行事ではないということである。ブルターニュの伝統的な民俗信仰(croyances populaires)の存在を前提としながら、それらの諸要素を取り込みつつ、キリスト教カトリックの教会中心の宗教行

事として構成され伝承されているのがパルドン祭りである。したがって、そこから逆にブルターニュの伝統的な民俗信仰の主要な構成要素をパルドン祭りの伝承の多様性の中に抽出することができるのである。その1つが本論で述べてきた火をめぐる信仰である。つまり、パルドン祭りはキリスト教カトリックがブルターニュ地方の伝統的で必ずしも体系的とはいえなかった多様な民俗信仰を組み込むかたちで作り上げた宗教行事であり、パルドンにあたるブルトン語が存在しないのはそれがそのままではブルトンの伝統行事ではなかったことを示す。しかし、逆にパルドン祭りの中にこそブルターニュ地方の伝統的な民俗信仰が伝承されたともいえる。火をめぐる信仰はパルドン祭りという伝承の場を得ることによって、時代ごとの意味付けを与えられながらも、本論で各地の事例を紹介したように、現在も生きて伝承されているのである。つまり、キリスト教カトリックの宗教行事が逆に伝統的な民俗信仰の保存伝承装置としての機能をも果たしてきているといえることができるのである。

注

(1) — 文部科学省研究助成基盤研究(海外)「民俗信仰と創唱宗教の習合に関する比較民俗学的研究—フランス、ブルターニュ地方のパルドン祭りの調査分析を中心に—」(代表:新谷尚紀)(2000~2002年)による。なお、本稿では原則として地名と人名は原語表記とし、必要に応じて片仮名表記とした。また、各地の現地調査において情報提供をいただいた話者のうち、承諾を得た場合に限って名前と生年を記した。

(2) — Georges Dottin 'Anatole Le Braz' "La Légende de la Mort chez les Bretons armoricains" Paris-Spezet, Champion-Coop Breizh,1990(1893), LXXII, p.12

(3) — 'Anatole Le Braz et La Tradition Populaire en Bretagne: Transcription du Carnet IV' [1892-1895] には、たとえば1892年7月7日にLocronanでの調査ノートにはMarie-Louise Moreauから話を聞いたことが記入されている。ところで、柳田国男や宮本常一の調査ノートについても、あらためて確認しておく必要がある。

(4) — 近代化のなかで、バス・ブルターニュ地方(ブルターニュ半島西部)ではブルトン語擁護運動が教会(司祭たち)を中心におこり、ブルトン語による『諸聖人伝 Buhez ar Zent』(1911年)も編集され、普及していったという[原聖 1982: 27-44]。このような歴史を経た現在、私たちのフィニステールを中心としたパルドン祭りの調査の現場において、ブルトン語をまじえたミサも行われている。

(5) — François de Kergristが "Société Française

d'Archéology" (Congres tenu à Morlaix et à Brest) LXII,1896に発表した論文に、H.Bourde de la Rogerie 'Notes pour servir a l'histoire de l'Eglise de Saint-Jean-du-Doigt' ('Saint-Jean-du-Doigt教会の歴史のための覚書') ("Bulletin de la Société Archéologique du Finistère" XXXVI,1910)をLouis Le Guennecが補足し改訂したFrançois de Kergrist / Louis Le Guennec 'L'église de Saint-Jean-du-Doigt et ses annexes histoire et description' ('Saint-Jean-du-Doigt教会とその付属品') (1910), Philip Winter de Quetteville 'Le Pardon de Saint-Jean-du-Doigt vu par un Pasteur Anglais vers 1870' ('イギリス人牧師が見た1870年頃のSaint-Jean-du-Doigtのパルドン祭') "Les Cahiers de l'Iroise" Octobre-Décembre 1960), 'La vie des saints de la Bretagne Armorique par Albert Le Grand' ('アルペール・ル・グランによるブルターニュ、アルモリカにおける聖人伝')(Translation du doigt de saint-Jean-Baptiste) (1634/1901), などの入手困難な論文をEric Tristanさんにご提供いただいた。

(6) — Le Chasse-Maree "BRETAGNE 100ANS DE PHOTOS ARCHIVES JOS LE DOARE" (Ar-Men, 2000)によれば、天使が教会の鐘楼からロープを伝って降りてきて、薪の山に火をつける例としてこの2つの町が紹介されている。

(7) — パルドン祭りと泉水儀礼の問題については、別稿で論じる予定である。

引用文献

- Alain Tanguy 1997 'La quête d'un folkloriste à la lumière de l'ethnologie : Anatole Le Braz et les saints bretons' "Hauts lieux du sacré en Bretagne" Centre de Recherche Bretonne et Celtique, Brest, p.285-305
- Anatole Le Braz 1994(1893) "La Légende de la Mort" Editions Jeanne Laffitte/Coop Breizh
- Anatole Le Braz 1998(1887) "Au pays des pardons" Terre de Brume Editions.
- Anatole Le Braz 1998(1887) 'Saint-Jean-du-Doigt : Le Pardon du Feu' "Au pays des pardons" Terre de Brume Editions, p.145-199
- Anatole Le Braz 1998(1887) 'Sainte-Anne de la Palud : Le Pardon de la Mer' "Au pays des pardons" Terre de Brume Editions, p.245-275
- Arnold Van Gennep 1999(1949) 'Le cycle de la Saint-Jean' "Le Folklore Français IV" Robert Laffont
- Bernard Tanguy 1999 'Le culte de saint Jean-Baptiste et l'implantation templière et hospitalière en Bretagne' "Saint-Jean-du-Doigt ; des origines à Tanguy prigent" Centre de Recherche Bretonne et Celtique, p.137-168
- Chanoine L.Kerbiriou 1942 "Landeleau dans la Cornouaille dans Monts" Imprimerie de la Presse Libérale,Brest
- Christian Pelras 1966 'Goulien, commune rurale du Cap-Sizun(Finistère)' "Etudes d'ethnologie" Paris,Masson
- Donatien Laurent 1995 'La troménie de Locronan;Rites,espace et temps sacré' "Saint Ronan et la troménie" Actes du Colloque International, p.11-57
- Ernet Renan 1973(1883) "Souvenirs d'enfance et de jeunesse" Paris, Garnier-Flammarion
- François de Kergrist / Louis Le Guennec 1910 'L'église de Saint-Jean-du-Doigt et ses annexes histoire et description' (F.de Kergrist "Société Française d'Archéologie" (1896) 初出)
- Fañch Postic 1987 'La Saint-Jean en Finistère. Richesse et gravité d'un rituel' "Ar Men" n°.8,avril, p.44-61
- Fañch Postic 1999 'Quelques aspects particuliers des feux de la Saint-Jean en Basse-Bretagne' "Saint-Jean-du-Doigt ; des origines à Tanguy Prigent" Centre de Recherche Bretonne et Celtique, p.137-168
- Georges Provost 1998 'La Fête et le Sacré' "Pardons et Pèlerinages en Bretagne aux XVIIe et XVIIIe siècles" Paris, Cerf
- Philip Winter de Quetteville 1960 'Le Pardon de Saint-Jean-du-Doigt vu par un Pasteur Anglais vers 1870' "Les Cahiers de l'Iroise", Octobre-Décembre
- Robert Hertz 1913 'Saint Besse: Etude d'un culte alpestre' "Revue de l'Histoire des Religions" LXVII
- アルフォンス・デュブロン 1992 『サンティアゴ巡礼の旅』田辺保監訳 原書房
- 相馬備郎 1961「柳田民俗学の文学性」『文学』29-1 p.23-31
- 桑原武夫 1976『遠野物語・山の人生』解説 岩波文庫
- 岩本由輝 1983『もう一つの遠野物語』刀水書房
- 柳田国男 1989 (1909)『後狩詞記』(『柳田国男全集』5 ちくま文庫)
- 同 1989 (1910)『遠野物語』(『柳田国男全集』4 ちくま文庫)
- 渡邊昌美 1989『中世の奇蹟と幻想』岩波新書
- 原 聖 1982「ブルトン語の抑圧と擁護」『思想』697 p.27-44
- 関沢まゆみ 2001「バルドン祭りにみる巡礼と旅-フランス, ブルターニュ地方 Sainte-Anne-la-Paludの事例より-」『旅の文化研究所研究報告』10 p.15-26
- 田辺 保 1992 『ブルターニュへの旅』(朝日選書)朝日新聞社

付記

本稿の執筆にいたるまで、多くの方々に御指導、御協力をいただいた。とくに、プレスト大学教授Donatien Laurent氏と同大学研究員Alain Tanguy氏、Saint-Jean-du-DoigtのEric Tristan夫妻、Cécile Senaux氏、Charmoille Sandrine氏、Isabelle Noesmoen氏、松上朋子氏、滝川広子氏の御協力には篤くお礼申し上げたい。

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)

(2003年3月7日受理, 2003年5月9日審査終了)

The Pardon Festivals of Brittany — Fires of the Pardon and Fires of the Summer Solstice —

SEKIZAWA, Mayumi

This paper is a trial of the relation between the folk belief and the Christian religion. In Brittany, France, there is a tradition with a strong Christian element that has been passed down called the Pardon Festivals. There are a number of different types of these festivals, some notable for their links to diverse popular beliefs such as a belief in sacred springs and a belief in sacred rocks. One interesting variation is called the tantad, which involves the building of fires. A typical example of this type is the Saint-Jean-du-Doigt Pardon Festival that takes place in the northern part of Finistere, in which there is the shocking sight of a sacred cross burning in the red flames of the tantad. A custom that is instructive when considering the origins of the tantad fires of the Pardon festivals in various parts of Brittany is the Feu de la Saint Jean (the fire of St Jean) held on the night of the summer solstice. A comparison of these two festivals reveals the following. In terms of traditional customs, the tradition of fires on the night of the summer solstice provided a foundation on which religious rituals such as the Pardon festivals came to be added, so that the fires of tantad came to be located within the Pardon festivals. It has been recognized that the traditional "fires of the summer solstice" contain an element of popular belief in that ancestral spirits are warmed, ailments of the eye are cured, and illnesses and bad things are burnt, corresponding to the three basic attributes of fire: heat, light, and burning.

The following features have come to light from the results of an analysis of a survey of the Pardon festivals held in various areas, some of which do not include the practice of the tantad fire. Elements that are indispensable to a Pardon festival are the existence of a chapel, a belief in saints and their relics, and a procession. A Pardon festival is not a religious event based solely on Catholic doctrine, but while it is predicated on the existence of traditional popular beliefs from Brittany, these elements have become interwoven so that it has been passed down as a religious event centering on the Catholic Church. Accordingly, it is possible to extract important elements of traditional popular beliefs from the diversity of traditions in the Pardon festivals. Beliefs surrounding fire is one such element, and it may be said that religious practices of the Catholic church have, conversely, served the function of preserving and passing down traditional folk beliefs.
